

私の想い出（4・9・19）

——多くの恵まれた出会いに乾盃——

広田可六（昭5・文丙）

昭和五年文丙卒の広田可六です。旧姓は団田可六で、一度も同姓同名に出合ったことはありませんが、「団君、君の名は変わっているなア、田可六とは。」なるほど、団で切れば琢磨もいる、伊玖磨もいる。三高入学この方一步も離れることなく、京一筋に生きぬいて六十有余年、よく京生まれの京育ちとまちがえられますが、生まれ故郷は北国の敦賀です。俳聖芭蕉も「奥の細道」の最後の辺で、大垣に入る前この港町に立寄って、幾つかの名句を残しています。

月清し遊行のもてる砂の上

名月や北国日和定めなき

波の間や小貝にまじる萩の塵

寂しさや須磨にかちたる浜の秋

殊に波の間の一句には、日本画の巨匠小野竹喬がいたく感銘、絵ごころをそゞろそゞられて、う

す紅のますほ貝萩の塵水清く白砂の波間を巧みにとらえて一幅の名画を成す。連作奥の細道抄の一コマで、これが彼の文化勲章受章の決め手ともなったと聞く。佳き哉。敦賀生まれの三高生はごく稀だが、一二年下の地元しにせ呉服屋だらやの正ぼんこと林正太郎、三高寮歌を英独佛の三ヶ国語に訳したマンゲルこと津田政男、それにフランス文学で文化勲章を受けた桑原武夫氏も数年以上のふるさと人、知る仁ぞ知るで、京大人文科学研究所を本拠に、八面六臂の大活躍、学界に論壇に名論卓説の数々、併し仁在りて曰く、長きを以て尊しとせず、短きが故に一入心打つ俳聖の十七文学、彼のかつての「俳句第二芸術論」など何のものかは、今も北国の古い港町ふるさとの一隅に、ひっそりと光を放つ不朽の名作、佳き哉と。丁度私が昭和二年三高を受けた時は制度が變つて居り、一高と三高というように二校併願が許されていたのです。しかし私は長兄が京大卒、それに兄嫁も京に学んで府一卒ということで、小さい時から京都は大変憧れの夢の町だったので。私は断固三高一つにしぼって頑張りましたが、お蔭で草深き田舎から然も四修で天下の三高に入れようとは、こゝおつむが一番およろしかった頃かと存ぜられ、あとはだんだん下ります。クラス文丙四十名の中大半は京一中を始めとする京都勢、ついで大阪神戸それに東京と続いて、そこにお座りの谷口三郎君のような奈良の山家の秀才など地方出身は、いづれのクラスにおいても劣勢。しかしいづれもさるもの、師も亦よろし。学びの体制こゝに整う。一高のようにしめ付けがないので、寮は入ってよし、なくてよし。下宿する者、自宅から通う者、いきなり運

動物部の合宿に引っぱりこまれる者、これすべて自由、早くも校風自由をまのあたりする想いで、のびのびと人間形成三高三年の春秋が幕あける。

当時の寮は北中南の三寮で、百七八十名位の寮生、もぐりも居て定かでないが、私は三年共南寮三番で過した。南三は自由寮切つての大部室で、いつも意気高らかに夢多き自由の子ら十二三名が屯していたが、揃って財界のトップを極めた金沢脩三、菊池稔、柴山幸雄を始め、一高戦の花形野球の内垣譲治、テニスの佐藤忠、インタハイ日本一、剣道の吉田金一それにバスケットと駅伝の広田可六等、多士齊々の面々が、何の縁あつてか、こゝに会し、生涯の親しき友になろうとは。室長会議が最高の議決機関、中五の総代部屋が執行部としてとりしきる正に文字通りの自由寮、すべては学生の手し、よき時代の先づは想出は、毎夜のように出かけるレギュラーコース、放歌高吟、荒神橋を渡つて府一の前で一段と声をはり上げ、二条寺町の鎔屋。細い階段を上がると、そこにお駒はんというベツピンさんが居た。目元の何とも云えないいつもにこやかな素晴らしい女性。それから梶井基次郎のレモンでも有名な三条柳馬場あたりの丸善で洋書の頁をペラペラとめくり、京極を通つて四条に出る。西すればコマドリ東すれば矢尾政菊水、矢尾政（今の東華菜館）は新築成つたばかり、入つた所のピアホールで、ジョッキの杯をあげ、それから円山へ、青い夜空の星くずが素晴らしく、あとは平安神宮、あゝ、そうそうその前の慶流橋では一斉に放尿して、流れ流れて地中海、さすがに熊野神社に辿りつく頃は疲れて、その辺の土管にもぐりこむ。

熊野から百万辺に市電工事の最中だったので。へたりこんで寝たかと思うと、どかんどかんと大きな音、これが三高名物ストーム。おくれてはならじとかけつける。ストームの翌日は必ずずいって、程京大病院からの抗議がとゞくので、一応校長に寮の総代が呼び出される。然しひそかに承ると森外三郎校長は逆に病院長に対して、建ったのは三高が先き、騒音公害の多いこの地に病院を建てようとは。頭の悪るさよ、言や佳し、遂に三年間とも断じてストームを止めなかつた次第。ストームはルールがあつて○時以後となつていたが一二例外あり、その一つは五月一日創立記念日、寮の各室は想いをこらしたデコレーションを造る、お巡りさんのハリポテの目が真赤でひどくとび出る、これメーデー、蛙のハリポテに更にバッチョ笠をかぶせて、愈々向うが見えない、向う見ずの坊ちゃん、題して漱石のケツ作等々、当日これを目当ての満都の子女、大変な人気で、寮が満パイになる、頃や佳しとふんどし一丁でくり出す男のパフォーマンス、真昼のストームなれど、これは許されていた。いろいろと想出は尽きないが、断じて忘れることの出来ないものが二つある。

一つはバスケの関西インタカレッジ優勝、関学をきわどく逆転し、京大にからくも勝つてのVだけに喜び一入、早速鴨涯の料亭に上つて祝盃、意気上るまゝにV盃を河原に投げこんで取手がとれる。幸い当時三高には化学のハンダ先生が居られ、ハンダ付けしてもらつて事なきを得た。バスケは創部新しかつただけにこのVは意義深く、その後インタハイ日本一になること二度への

きつかけともなつたと云えよう。

二つ目は陸上部に雇はれて走つた京都駅伝での山登り、駅伝と云えば今日世界語と云える程ポピュラーにもなり盛んになったが、当時は東の箱根駅伝位のもの、然も京都駅伝はコースが素晴らしく、御所の建礼門をスタートして、大比叡を登り下り、大津、宇治、桃山、嵐山ラストコースのゴールは平安神宮、全長九十二キロ半の十区間、山あり谷あり湖ありその間京の名所旧蹟を網羅して、京ならではのこよなきコース、想えば昭和五年一月十九日第二区に挑む。大原道の長谷出から比叡の根本中堂までの上りばかりの山路五キロ、途中に四五百段の石段もあり、折悪しく夜来の雪一尺をふみわけ、かき散らして一気にかけて上った。然も三十四分四十三秒の驚異的な区間新記録。陸上部の友への友情を果し、北国男児の心意気も示して。今もこの山を仰ぐ毎に私はそこに一つの青春を見る。

青春といえばいつか私は次のような望郷の詩を作った。

懐しきは

ふるさとの気比の松原

二つなき白砂青松

春されば 北の山赤紫にうづき

越の海こはだ色なす

禅林庫裡うらに残る淡雪

あかつきとるいさだ

白魚白きこと一寸

出世魚の味のめでたき

夏は青松に風涼し

ビーチパラソル彩るあたり

ナホトカに通う海路

おのこらのヨット飛ぶ昼さがり

とび散る夜光虫

まこと濃く水に影して

風の初秋や

昨日とすぎし青春の

曼珠沙華あかく

夏はぜの実は既に

北国に冬はも早く

つめたく乏しきうすれひ

苔むす丈余の頌徳碑

名もなく貧しく美しき

明治半ば既にして

又きく村小学校の一建立者と

県下はじめの藍綬に輝く

とし毎に数ます人さわの渚辺

大亀に人気呼ぶ水族館

あしたには乙女子のスクール滑り

夜に泳げば満天の星しづくして

遠く水島あたり数いくつ漁火

ひとり来て苔にふす

雲白く汐騒遠し

萩うるし奥の細道

小鳥の啄みしか

こがらしに舞うわくらば

この公園の一角に

我が祖父N翁が遺芳を刻す

この寒村のパイオニア

漁農組合の創始者

風雪七十幾星霜

海青しふるさとの氣比の松原

夢遠しふるさとの氣比の松原

柴山幸雄（住友商事社長）も亦昭和四十八年三月十二日附の日経交遊抄で、本当に青春のよき日であったと「夏の敦賀」を懐しむ。

紺碧の空と海、白砂と青松、それが敦賀の松原海岸であった。その公園の中に団田（今は広田）可六君の叔父さんの家があった。

三高を昭和五年に出た我々は大学の夏休みをそこで過すのが楽しみで、京都から、東京から、文科のものも、法科や経済のものも、医科のものも三々五々、北陸の一角、敦賀に集った。叔父さんは世話好きで、サツパリした人だった。食費の実費だけで二階を開放し、奥さんをはじめ、一家をあげて、いつも我々を歓迎してくれた。

海岸に行くと白系ロシアの一家があり、二人の姉妹がいた。また町からパラソルさして毎日泳ぎに来た女の子、そして京都から二人の女学生が家の人と毎年避暑に来た。異国の乙女も日本の乙女もみな快活で躰のよい、花咲ける乙女であった。皆はすぐ仲良くなった。釣に出ればキスがいくらでもとれた。

海に行かぬ時は、本を読むもの、碁やマージャンをするもの、人生・社会を談ずるもの、詩作にふけるものなど、それぞれ、またそのときどき、己の欲するところに従った。ただ、だれか来

たり、帰るときは、皆で敦賀駅に行つた。その歓送会は、町のメゾン・イソガイの二階でビールを飲んだ。

時には「自由を我等に」合わせて男同士で踊つたりした。その仲間を記すと、金沢脩三（三菱レーヨン）、菊池稔（東京海上）、頼桃三郎（広島大）、佐藤忠（住友診療所）、村上至孝（阪大）、横尾克己（NHK）、それに一二年あとの林正太郎（川鉄商事）、雑賀の留公（街のアンチャン顔負け）、これらのほかに小川利夫（モズこと百米の本チャン）、終戦后まもなく故人となつた。話題に富む好漢であつた。今でも惜しまれる。

想えばこれも亦めつたにないようなすばらしい一つの青春をそこに見るような。

私がいさ、か加筆致しますと、頼桃三郎はいわずとしれた山陽の直系、詩才豊かに語学力抜群、「沼太郎の夢さますか月のむれ」「立つ秋やその涼風に寝乱れの露もしとゞと萩おみなえし、やる瀬涙のひと時をさめてあさぎの朝顔に、うかと眺むる女の眉」題して「童貞喪失の詩」この名句、この戯れ歌共々に我が心に忘れ難い。桑原武夫氏がフランス語なるものを始めて教え給うたのが、たまたま我クラス、時に頼桃三郎のつゝ、込み鋭くたじたじ目を白黒、しかしこの白黒がやがてスタンダールの赤と黒につながつたとすれば。

三高自由の精神のもと、上下左右のこだわりのこんなにくくないところも珍しい。陸上部で湯浅キャプテンのあだなが兵隊で、マネージャ榊原のあだなが將軍、佳き哉。吉川泰三先生の直話

によればノーベル物理学賞三人男の三高物理の成績は、いやはや芳しからざるものであったとはまことにほ、えましい。

さて私の大学は京大心理学専攻なれど、殆んど教室にはよりつかず、専ら教育の木村素衛、哲学史の九鬼周造に心酔私淑、木村さんは教育の特殊論文に、友の荷風ばりの手紙を主体に「ひとり静か考」を出して「優」をもらったのが始まり、何のえにしあつてか、大好きだった信州での先生のご死去までずっと可愛いがつていたゞく。あかぬけてすつきりと張りのある色つぽさ「いきの構造」、何のえにしあつてかゆくりなく出会う「偶然性の問題」かたき石をたゞく者は幸いなる哉と「日本詩の押韻」その末尾を飾る自ら韻をふむ日本詩の作例はお見事につきる。

どうにか卒業することになって、私は絶体京都は離れまいと一大決心をする。何故か、それは京女が素晴らしいから、「清水へ祇園を過ぎる桜月夜今宵会うひと皆美しき」「四条橋おしろい厚き舞姫のぬかさ、やかに打つ春あられ」素人はんも玄人はんもよろしおす、ゆきずりに見る美女たちのかりに換算してその花代いくばくぞ、ちよつとやそつとで、都落ちなどもつてのほか、その決心を貫くために、代用教員になったのです。女教師のはらがふくらむと出かけ、すばむと次につる。十月月に五校歴任して、やっと西本願寺近くの学校に落着く。訓導にもなつて、四五六と持ち上り、男子一組だけ卒業させる。

子供をよく育てるためには、子供のことがよくわかっていなければならぬ。元より愛が一番

大切ですが、まっばだかで、子供の世界に飛びこんで、そこから子供と共に上る。これには修身などのお説教でなく、綴方がよろしかろうと始める。自分で見たり聞いたり、思ったり感じたり、考えたりしたことを、ありのまま、かくさず素直に自分の言葉で吐き出す、こんな子供との約束をして始めたが、仲々甘くない。「じっと見つめて三十分」「耳を澄して二十分」初めは全く短くて話にもならなかったのが、ぼつぼつ長くもなり、これはと思うものも出てきた。「お西の屋根が太陽をかじった。」には度肝をぬかれたが、「さーさー」さ、やかな水の流れの音を聞きながら山道を上って行った。しとしとと音がかすかに伝はる。見上げる緑の木立は川風に吹かれながら、つんとそのかたい梢を大空に突き出している。その梢に一つ白い綿雲がひつか、っていた。子供の目のカメラアングルは大人の目のそれとはちがっているのだでしょう。

青空には、一てんの雲もない。

晴れやかな五月のみどりの月は

こいのぼりが上る。

どこの家でも、大将人形が目を見ている。

わがはいは皆の目を見た。

かゝやきが一ぱいある。

とんぼの親分

青空に

青雲の

ぶーんとうなる

あいだを通る

とんぼの親分

軍隊とんぼとんぼが

日本見物

驚く目をまはす

山修さんが一番はめてくれた男らしい詩。かと思うと、母の病気を見舞って、涙ぐみながらの帰るさ、「室をでると僕のくつが寒かったからか、おりかさなって暖めあっていた。」このしみじみとした子供心には木村素衛さんが一番心うたれたという。

「一條の水脈に流る、かもめかな」

突堤のまわりを白いかもめが群とぶ、突如モーターボートがすごいスピードでかすめ去る。あとに一條の線を残す。一羽のかもめがすーっと大きな翼をひろげて、水脈に下りて来た。かもめはきよとんした目つきで、羽をすばめていうという流れ出した。ほんとに美しい情景だ。僕は出まかせに歌った。

「一條の水脈に流る、鷗かな」

ぼくはなんべんもなんべんも心の中で読みかえた。

私は思う。先輩三好達治の春の岬のかもめどりに劣るまいと。

私は入試が近づくにつれて、こんなことばかりやっついてい、のかかと思う矢先、或る朝、便所で

朝刊をぱつと開いたとたん、来春の中学入試は綴方一本と目に飛びこむ。「やったーまだ運がっているわい。」おかげで、子供達はそれぞれ希望の中学にゆうゆう進学出来た次第。まことにめでたし。

又、木村素衛さんが序文「どくだみの芽」くさくてきたないからきらいは大人、子供はやがて四弁の花咲くどくだみの芽にすばらしい話を聞くといい。山修さんからも、すゝめられて、「子供の目と耳」の一書にまとめる。入試綴方一本槍の折柄でもあり、人気は上々、朝日ブックレビューにもとり上げられて、美しい日本語を愛し、子供の生活を豊かにする効果は大きい書評がうれしかった。

これをくぎりに桃山にある女子師範学校に栄転、今度は子供を教える先生の卵どもを教えることになった。「おめでとーうさんとす。お祝ひしまひよう」先斗町なじみの姐さんら自花を切つての酒ほがひ、春宵一刻価値千金、情が身にしみる、北白川からとはちごうて、こゝからなら桃山はほんちこおす。京阪はホラ目の前どすさかい、早速クラ出して来たモーニングにアイロンもあて、くれた。白いハンカチも胸にピシツときめて、翌朝この花街から女の園に颯爽と赴任したのである。実は万亭の床の間にふと覚めて、教室にはせ参じた代用教員時代のこれは豪華な前科もあるのです。そして二ヶ月後に、年貢をおさめて私は結婚したのです。彼女は中京商家の娘、そこにおこしいたゞいてる米谷先生の奥さんとはクラスメートの府一卒、小さい時からシヤミの音

にひかれ、娘時代は長唄のけいこもっぱら今も小唄に転じましたが、週一度のお習いはいそいそと、名取の端くれにもなつて、こよなき老いらくの楽しみ、いくなれば、ダンナは外でロジャミセン、女房内で唄ジャミセン。金婚式もとづくに過ぎて、何とかよろしくやっています。

私たち結婚の仲人は、当時の市会議長Tさんで、二中中山校長の秘蔵っ子、一高、東大卒、朝日新聞から転じて政界入り後、国会議員にもなる。つながりは小学校づつと最後の学区の実力者、何の縁あつてか、当時から大変可愛いがつていたゞき、この八方破れの男が、当直をすっぽらかして、先斗町のお茶屋で、除夜の鐘をきくことが出来たのも、キレイどころに沢山顔なじみが出来たのも、この花街に想はれびとがいて、浮名立つこの風流人のおかげ、粹もあまいもかみわけたダンナはんとした。その番頭のOさんはこの世界で、おにいさんと女どもから呼ばれる程の通目から鼻へぬけるテキバキとした切れ者、仲々の世話好きで、私たちの初旅は、この人のプランで、みすゞかる信濃路、「窓近くアカシア咲きぬ空の青」の上諏訪、「湯上りのほのぼのとしも桐の花」の浅間、そして「ランプ細め小梨に雨をきく夜かな」の上高地等々。想い出はつきない。木村先生の可六君信州に旅するとき、て旧懐を録す。

夏雲の高湧く見ればむらぎもは

遠き山脈恋ひわたるかも

いつの間に書かれたのか、先斗町の名妓ずらり名をつられる色紙「寿」

よりそえば色香いやます花あやめ

いつ迄も心に残るもの、ありがたいことである。

さ青にしみて梓川

から松芽ぶく頃なれや

初旅の日の夢かなし

霞六百槍穂高

中でも槍は后年親交を結んだ近藤悠三染付上絵の得意中の得意、この地にはスケッチの為、幾そ度か足を運んだと聞く。これも何かのえにしか。

私は再び転じて、堀川高女へ。新任早々の校長は前から親交あり、「片腕となつて、新風を吹きこんでほしい。」の言や佳し。大戦直前のこと。当時は地域制で、石堀小路、高台寺、下河原、祇園、先斗町の粹筋を含む下町一帯、京のいはば町娘の通う学校で、人懐っこい優にやさしい京言葉、どこか霞むような匂ふかんばせ、これなる哉。断じて都落ちせずの決意に狂いなかつたことにほくそ笑む。サラリーもらつて、花代はただ、それが毎日楽しめると来るから、こたえられない。すつかり若がえる。お茶屋の娘さんも何人かは来ていたが、却つて躰がきびしく、身だしなみもぴしつと決っている所は、さすがお見事。あしたに修身の教えを垂れ給ひ、夕に家庭訪問（断じてたからず自前なり）する先生、ほろつと酔がまわつたころ、「先生お、きに」さらつと

挨拶に出て来て、さっとさがる。翌日の教室では元よりけろっとしたものの。一組担任して卒業したが、こゝは在任一年半で、三度転じて、市役所入り、教育局の視学となる。

思えば面白いもので、最初子供の先生、ついで、先生の卵を教える先生。そしてこゝに、先生を指導監督すべき視学となる。戦后何の故あつてか追放。しかしやがて、高山市政下、市長公室に返り咲く。広報秘書を歴任。当時京都タワー建設可否を巡って賛非両論、可六語録はうそぶく。「これすべてタワごと」。あまりの忙しさに「せめてひと時シチョー知らずの碁が打ちたい。」と歎く。

姉妹都市を最初にパリと結んだこと、あとは、すすいポストン、フローレンスと続く。坊主とけんかして迄京都会馆を建てたこと、地方附加税は税の処女地にしか許されず、無税だった寺院の拝観料に目をつけたのが始まり。

京響の創設、キリストは馬小屋に生まれ、京響はボロ校舎に生まれる。今は新しい京都の文化財とまで、うたわれるが、一時は市の単費（自前の金）を多く食うのでやめろの声も世論には勝てず。公的バクチ、宝ヶ池競輪をすっぱりやめる。このテラ銭の魅力は大きく、向日町競輪は蟻虎を以てしても遂にやめることが出来なかつた。跡地は子どもの樂園に。

河野一郎、松下幸之助ら政財界の協力を大きくいかして誘致した宝ヶ池国際会議場等、治績は枚挙にいとまなし。財源に乏しいこの古都で、先づアイデアで金をひねり出し、又創意工夫、金

では買えないものをやっつてのけたところが凄い。何の縁あつてか、この名君の側近に仕え、微力ながら、いさゝかでもつくしえたことは、我が生涯きつての感銘でもあり、ひそかに自負する誇りでもある。

在職十六年間、部下に一人の汚職者もなく、きびしいばかりの仁かといえ、ぐっとくだけた所がうれしい。高山義三を偲ぶ集いで、実姉（ホットパンツで、都大路を自転車で飛び廻った明治のモガ）のお話で、義三は少年の頃は大のはにかみや、番頭はんが、からかつて、「ぼん、早よ早よ、ベッピンさんが通らるえ」彼は顔を赤らめて尻込みしたと云う。「そのアトは知りませんけど。」今昔の感に堪えないと皆で大笑い。弁護士という仕事柄相当の遊び人、芝居のこわいらなど玄人はだしの粋なもの。晩年になつても、おしゃれでええかつし。「うすうならはつたのに、毎朝鏡とにらめっこして。」と美人のほまれ高い奥さんがからかう。こんな幅の広い硬軟合せた人柄が、高山さんの魅力ではなからうか。

街はミッチブームに湧く昭和三十四年の春、京都美大に事務局長として赴任。この学校は明治十三年御所の一角に京都府画学校として発足、東京美術学校に先立つこと十年、日本で一番古く、その後、幾そ度か校名を変えつ、今日の京都芸大となるが、思えば京都にびつたしの大学で、印象、平八郎、神泉、竹喬、華楊、松篁、遙邨など世に名のある巨匠はもとより、地元伝統産業、染め、織り、陶芸等家業をすっかり受けつぎ、しっかりがんばる子弟も多くこゝに学んでいる。

当時は日本画、洋画、デザイン、彫刻、染織、漆芸、陶芸の七科目一学年百二十五名の定員、専攻科若干名を加えても、五百余名の小さな大学。それだけ入学は大変だった。教授陣は榊原紫峰、上村松篁、黒田重太郎、川端彌之助、小合友之助、稲垣稔次郎、富本憲吉、近藤悠三、辻晋堂、堀内正和、平館曾一郎等、実技の巨匠綺羅星の如く、正に黄金時代とも云えようか。いづれ劣らぬ一徹者、学科の方は二の次と思いきや仲々の学者論客もいて、頼もしい。不平の輩もいる、日頃のうさ晴しもあつてか、口ばかりが達者なへそ曲りが、時に教授会をかき廻はす。過去にしはば市当局とも争いを起しているうるさい所、当時は芸術のゲもわからぬ私にとってえらいところだと思つたが、そこはそれどんとこいの三高自由の精神で、中央突破したら、門は自ら開けた。あけすけで、何ものにもとらわれない八方破れの生き方が、実技巨匠の何人かの共感を呼び、ぼつぼつ親しくおつき合い願えるようになって来た。人間の縁とは不思議なものですなア。

それから暫くして池田勇人が総理大臣になる。地元選出の大野木秀次郎参議院議員から、ちよつと縁つゞきにもなるので、「広田君、然るべきお祝いを美大関係で選んでくれないか。」と云つて来たので、いろいろ考えて、事が事だけに、こゝは最高のもの、富本さんの作品が、よかろうと思ひ、先づその弟子の近藤さんの所へ、大体の相場、見当を聞きにいったのが、実はこゝにその作品を並べている近藤さんとのつき合いの始まりなんです。全く何も近藤さんのことは深くは知らなかつたのに、話している中に「はあ、えーのおまつせ」と。どう勘ちがいたのか、「自

分のとこにえ、のがあると」云わはるんです。そして出して来た、これ位の壺でね、肩のあたりを赤地金彩のざくろがとりまく素晴らしいものでした。その年の伝統工芸展に出す作品がやっと出来上ったというわけですよ。一目見るなり、全くの素人なれども、目からうろこが落ちたみたい。はっとして「はアよろしいなア」結局それをいただくことになったのです。それは少なからざる金額でした。後でわかつたんですが、近藤さん、耳が遠いんですね、耳の遠い話が、えらい耳よりの話になったというわけ。それが始まりで、生涯通じての悠三さんとの深い縁になろうとは。

この悠三さんの恩師が富本さん、当時既に人間国宝、東の板谷波山と共に押しも押されぬ型陶芸の第一人者。土ものから始めて、染付、白磁、金彩といづれも頂点を極める。端正な英国型の紳士でしたが、仲々のしやれつけには驚きました。作品の花押を年毎にかえて行く。富の字に田のないのは戦後不在地主で田を取りあげられた年のこと。口がひどくゆがんでいるのも、その口惜しさを示す、又富の字全体がひどく左前にか、れているのは、暮しが傾いて左前になったという。大へんユーモラスな遊びで、思えば芸術にはこの遊び心が大切なのでしよう。

「美とは何ぞや」「美術教育とは何か」大へんむつかしい問題ですが、こんな話があるのです。火をあつかうところは必ずお火たきをやる。美大陶磁器科でも毎年これをか、さない。荒むしろをしいて、ふだん上ぐすりをとく鍋をよく洗って、とりすき。やおら始めんとする時、ひと片の桜もみじが、ひらり落ちて美大切つての美少女の前髪に。「オオソレミヨ、これが美だ。」と富本

さんはのたもった。

富本さんの口添えで、悠三さんの作品が売れた。先は灘の酒屋さんとさく。山海の幸、さわ山に、呑助の若き悠三さん宝の山に入ったようなもの、遂にへげれけ、箱書どころの騒ぎじゃない。この時憲吉少しも騒がず

悠三大酔

憲吉箱書

この師にして、この弟子あり、この弟子にしてこの師ありと。

又、美術鑑賞も、むつかしい。

美大にEさんという長く勤める用務員のおじさんがいた。美術展が近づくと、学生たちは「この絵、とほるか、とほらんか。」とこのおっちゃんにお伺いを立てに来る。「アカン、これはそこそこ、これなら通る」これがびたりとあたるところが愉快。何故か、このおっちゃん、美大に長く居つづけて、いくつも本物ばかりを見つづけている見る目の確かさ、木堂も自分の書らしきものを持こまれて、言下に偽筆なれども真筆にまさると。にせものの壺を本ものと断じて首になつた文部技官もいる。真贋いづれかむつかしいところだが、こゝに並ぶ悠三作品はいづれも本ものばかり、海堀君の心づくしの酒もある。人間国宝悠三ぐい呑で一こんやりませんか、心は忽ち天下人めく真昼酒。

染付皿に 美味少々

金彩盃に 美酒ちよっぴり

ひそと つ、ましく

つや、かに はんなりと

この悠三得意の染付の原石ゴスは、主成分はコバルト、だが多少の鉄マンガンを含むため佗び寂びの味が出る。西洋皿のたゞ青いばかりはコバルトのみのため、この染付で人間国宝を始め生涯いろいろの賞を受けたが、「賞自ら来たる」と常に淡々たるもの、その都度心温たまる祝宴、縁深きが故に、私も幾度か祝辞をのべる光栄に浴しました。その一つ。

先生、おめでとうございます。奥さんまことにおめでとうございます。いつでしたか、先生と一ぱいやりながら、「先生とこも、もうそろ／＼金婚式どすなア。」と申し上げたら、「そうどすけど、うちとこは、五十年たつても、それに二三年はたさんなりませんのや。なんせ、若い時から極道としたさかいに。」と二人で呵々大笑したことがあります。先生も来春は明けて七十二才の当り年のトラ、若い時からのノミトラ仲間のお一人、幾野風船子も、のたまうように、祇園町から木屋町筋とだ、ら遊びのあげく、随處に大トラ小トラ振りを發揮して、随分奥さんを手こずらせたこと、存じますが、近年は酔えばよく「うちのばさんには、かてん。」ともらされる。実はこれが先生のいつわらざる本音でありましょう。奥さんの手綱さばきも鮮やかに、今や大ト

ラ変じて福の神、福壽康三拍子揃った大トラの子のカミとして、あらたかに鎮座ましますことは、お目出度い限りであります。

奥さんそっくりのいつもお元氣な一番上のお嬢さん、次のお嬢さんが嫁入られた信州めとば窯、篠田義一君も若い時から先生の薫陶を受けたお一人、それにあと取り息子の名の通りゆったりゆたかな豊君、次男坊のチャキ／＼濶達な濶君といづれ劣らぬカエルの子、親父があんまりえら過ぎて、ちよっぴりしんどいともあると思はれますが、そこはそこ。立派なもので、今宵居並ぶ弟子の面々。一騎当千の士ぞろい。いうなれば悠風ご一家、いうことなし。私も騏尾に伏して、院外団のはしくれと致しまして、ご同慶の念に堪えません。この度のご栄誉を得られました先生並びに今日の先生をかくもご立派に飼育されました内助の功厚い奥さんの並々ならぬご苦勞に對しまして、先づ以て、ご一同さま共々拍手を以て心からの祝意を表したいと存じます。さて、先生が衆望を荷って、美大学長になられましたのは、昭和四十年の秋なかば、その時の就任の辞が、まことに型破りのふるったもの。開口一番、「私は茶碗屋、学長の仕事も大事やけど、これからも、どしどし作る。諸君もついて来い。」と一言よくそのものズバリ、すべてをつくすご決意の見事さに、度肝ぬかれて、さすがの美大野郎も、しばし啞然たるものがありました。やがて万雷の拍手を以て、この学長を心から迎えたのであります。

以来先生にはこの公約を忘れることなく、数々の名品を生み出され、次々と私達を喜ばして呉

れましたが、時には遠く、イランに遊んで、名もゆかりのザクロス山系、古都アバダに程近い古陶村ラレージンを訪れて、うさんくさそうに取りまくイラン陶工を尻目に、手助けなどわしやイランという顔で、そこは腕の確かさ、もって生まれた取りの速さのカンとコツ、忽ちにしてペルシャンブルー三千年の夢を再現されました。もち帰った作品の数々は、京都、東京、大阪と展覧され、好評サクサクたる裡に、文字通り洛陽の磁價を高からしめました。とりわけ、昨秋、東京高島屋での染付金彩、呉須三昧、作陶五十年近作展は、いともサラなり思うツボの正に天下の圧巻で、百余点の作品を初日にして、忽ち売りつくすという、うなぎのぼりの今や人気絶頂、私ども悠三ファンにとりまして、誠にありがたく、こよなき目の正月でありました。

いつか、先生が私の宅に見えられた時、「はア、こんなぐい呑も、きとりましたか。」と。思えば「酒かなし唐国わたり古天目」「山茶花や李朝永仁宋胡録」「春は岩谷の花宴、秋清水の紅葉賀に」折にふれての先生との茶碗談義や酒ほがいの数々、その都度、先生から公然と頂戴したのもあれば、ときに酔にまぎれて、思はずポケットしたのもなきにしもあらずか。これは私が悪いのではなく、先生の作品がツミなのでありましょう。

作家の井上靖さんも、「呉須三昧」の中で、家宝として、事ある毎に座右に楽しむ染付金彩梅の大花瓶は、初対面でのひと目ぼれが、病みつきのもと、感銘して居られますが、いうなれば、先生の作品には、一発でほれさして、ほしいて堪らんようにさせるあやしくも不思議な魅力がこ

もつて居るのであります。老いて尚、いみじくもほのぼのとして、その作品ににじみ出るあの色気といふ、あのつやといふ、いづれも「道を極めるこれ極道」の極め付けでしょうか。

当時、東大総長だった大河内一男さんも、まだ箱書が出来ていないのに、矢もたてもたまらず、裸のまんまの染付金彩の大どつくりを、ひしと胸に抱きしめて、子供のように東京に帰えられたは、えましい情景も今更のように思い出されます。

若い時からの無二の呑みづれ、粟田焼の伊東陶山さんも、「悠さんのぐい呑みは、天下の絶品や、なんせ、若い時から呑み助で、酒の心がようわかっとなる。行きとどいてまっせ。」と感歎久しうして居られましたが、先生のぐい呑みでいたぐくと、同じなだたる生一本でも、一味ちがいます。いや一味も二味もちがう所が妙で、すべてこれ天下の美祿、私たち左党にとつてとてもたまらんとところであります。又美大学長と致しましても、時あたかも、全国的にケバ棒騒然、学園紛争のまつたゞ中にありましたが、先生には何ら臆する所なく、二期六年、よくその大任を完うされました。その間、ご苦労があつたことと存じますが、よく音楽短大を吸収され、京都芸大の開学にふみ切られましたことは、これひとえに、先生の慈味掬すべき人間味と、事に處しての大局をあやまらない切れ味の鋭さにあるものと存じます。

初代京都芸大学長近藤悠三の名は、輝やかしくも、歴史の一頁に、永久に残るものと、心から敬意を表するものであります。あれを思い、これを思ふ時、先生のご業績の数々、この度の叙勲

並びに京都市文化功労者としてのご受章は、むしろおそきに過ぎるうらみこそあれ、まことに宜なるかなであります。師に恵まれ、弟子に恵まれ、ご家族に恵まれ、そしてファンに恵まれて、先生はまことにお徳な御仁だと常日頃感服の他はありませんが、この夏も東京で「悠三作品を樂しむ会。」これは又、珍しくもうれしい会が催されましたが、麻生多賀吉、大河内一男、井上靖、今藤長十郎等々、各界に渡るソウソウたるファンが、自分の愛蔵品をもちよつての東京美術クラブでの、いはゞ虫ばし自慢の会。高松宮ご夫妻も見えられましたし、世話人の一人、磯野風船子にはしむれば、「生きてる中に、ファンが持ち寄つて自分の名作展を開いてもらえるということは、近藤悠三、まことに命みようりにつきる男。」これなどひとえに、先生の人徳の然らしめる所でありましょう。

この度の重ねがさねの朗報に接し、今は亡き恩師富本憲吉先生も「近藤君、ご立派になられて。」と心から喜んでいらっしやるでしょうし、思えば、昭和三十六年十月十八日、富本先生が、文化勲章受章内報の夜のこと、殊のほか、お喜びのさ中、一同を前に、「染付にかけては、近藤君の右に出る者はない。」と生前、既に日本一の折紙を付けられました。先生も亦、常に「私の今日あるは全く富本先生のおかげや。きびしおしたけどなア。」としみじみ懐しまれ、その師に対する札の厚さはホトホト感心の他はありません。六月八日の命日が近づくと、遠く法隆寺のほとり安堵村まで出かけて、墓参をかかしたことがあります。稔るほど頭のさがる稲穂かなで

あります。自ら生い茂る夏草を払い、墓石を清め、持参の花をさ、げ、香をたいて、深々と黙礼される先生並びに、奥さんのお姿を、いつもお供して、私はこよなく美しいものと感じて居ります。

この度の先生のご挨拶にもありますように、「今后共、陶一筋をありがたく嬉しく生き切る所存」と。

どうか先生には、益々ご健康で、ありのすさびに悠々自適、華やかで美しく、豊かでも力強い名品の数々で、末永く、私たちファンを喜ばして下さい。

野人札にならず、心やすだてに、つい好きすっぱ申し上げた失礼の段、平にお許しただきまして、以て今日の佳き日の私のご祝辞と致します。祝辞は以上であります。本日は、ありがとうございます。これで終りと致します。

——多くの恵まれた出会いに乾杯——

(元京都芸大事務局長)